

壇の越遺跡・早風遺跡

平成20年度発掘調査 現地説明会資料

平成20年6月15日(日) 午前10時30分～ 宮城県教育委員会

1. はじめに

壇の越遺跡は、奈良・平安時代の陸奥国府・多賀城から北西約35kmの加美町鳥嶋・鳥屋ヶ崎にあります。その北、20mほど高い台地の上には陸奥国賀美郡の郡家(郡役所)跡として国の史跡に指定された東山官衙遺跡(以下、東山遺跡と書きます)が隣接しています。東山遺跡は、最近の調査で奈良時代末頃に新たに外郭施設が設けられ、隣接する壇の越・早風遺跡などを含めた東西1.2km、南北1.4km以上の広大な範囲をその内部に取り込んでいることがわかりました。このため、東山遺跡は単なる郡家ではなく、軍事的機能を併せ持つ城柵であった可能性が指摘されています。また、壇の越遺跡は、奈良時代前半に東山遺跡と一体となって碁盤目状の街がつけられました。

今年、1) 東山遺跡正面に設けられた区画(南郭と呼びます)西側で南2道路跡を確認する、2) 早風遺跡で発見した外郭施設の東辺を確定することを主な目的として、宮城県教育委員会が5月12日より発掘調査を実施しています(壇の越遺跡114～116区 面積:214㎡、早風遺跡○地点 面積:14㎡)。

2. 発掘調査成果の概要

【壇の越遺跡 114～116区】

114区で南郭大溝の南西隅を発見しました。これにより、大溝の東西長は215mであること、大溝は中央が一段深くなる逆「凸」形に掘られたことがわかりました。116区では南2道路跡を検出しました。路幅は4.0m前後で、北側溝と南郭大溝との関係は、両者の南壁がほぼ一致すると考えられます。また、115区は67区で発見した大形の南北棟建物跡の東側の様子を調べることを目的としましたが、近世より新しい遺構が多く、古代の建物跡は確認できませんでした。

【早風遺跡 ○地点】

丘陵端部と東斜面で南北に延びる古代の堀跡を確認しました。規模は前者が上幅3.4m以上、深さ1.9mで、後者は上幅5.5m、深さが1.0～1.2mあります。土塁状の高まりは認められませんが、堀跡の位置や規模、断面形はb・h・n地点と共通することから、本来は丘陵端部に土塁があったと考えられます。

3. まとめ

①南2道路は幅が4.0～5.6mあり、他の道路より広くつくられています。また、南郭大溝は、南2道路の北側溝の南壁に合わせてつくられており、南郭の設置後も道路の幅は変わりませんでした。こうしたことから、南2道路は碁盤目状の街のなかでも重要な役割を持った道路と考えられます。

②早風遺跡○地点で東辺土塁跡の位置がほぼ確定できたことにより、奈良時代末頃につくられた外郭施設は、東山遺跡を中心として東西1.2km、南北1.4km以上の広大な範囲を囲んでいたことがわかりました。外郭施設は、西辺の東西大路側が築地塀、そこから離れた北側が材木塀、北辺と東辺は土塁であり、場所によって塀の構造が異なります。築地塀は、メインストリートである東西大路に面した部分につくられ、槽が伴うことから、防御施設であるとともに律令国家の権威を誇示する役割を果たし

たと考えられます。

③壇の越遺跡の基盤目状の街は、東山遺跡の創建とともに奈良時代前半（730年代）につくられました。都のミニ版ともいえる地方都市は、全国で数例認められますが、その中でも本遺跡はもっとも古い例です。この時代の大崎地方は、平城京（現在の奈良市）を都とする律令国家にとって太平洋側における最北端の地でした。また、律令国家は東北地方全体の支配強化のため、多賀城から出羽柵（のちに秋田城）への道路をつくろうと計画し、東山遺跡や城生柵跡を拠点として道路建設が始まりました。こうした状況のなか、軍事施設を兼ねた役所（東山）と都市設計に基づいた整然とした街（壇の越）が一体的につくられています。今回の成果は城柵・官衙の研究、古代都市、古代交通の研究だけでなく、律令国家による辺境支配の実態を考える上でも非常に貴重な発見といえます。

4. 今後の課題

今後の検討課題としては、以下の点があげられます。

1) 外郭施設の南辺や北西コーナーの位置と構造を明らかにする。2) 櫓など外郭施設に伴う建物を確認する（特に、東西大路の東延長線と外郭東辺の交点は門が想定される）。3) 外郭北辺と東辺の内側にあたる丘陵部分の施設の様子を調べる。などの点をふまえて、4) 東山遺跡や南側の壇の越遺跡、北側から東側の早風遺跡や上の山遺跡の時代ごとの姿を明らかにし、5) 東山を中心とした遺跡群の歴史的な意義を考えていく必要があります。

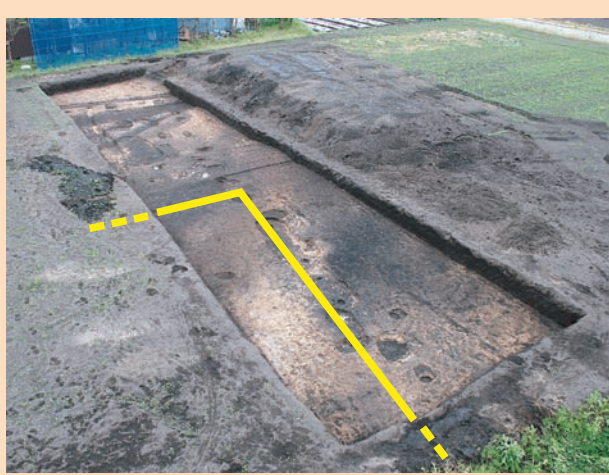
こうした点を明らかにするためには、地権者をはじめとする地元の皆さんや関係各所・各課の理解や協力が不可欠です。これまでの発掘調査に対する配慮に感謝するとともに、なお一層のご理解、ご協力を賜りますようお願いいたします。

謝辞 発掘調査に際し、地権者の渋谷太造氏、後藤佐市氏、渋谷秀雄氏、渋谷まさし氏、内海百合子氏、鳥嶋区長の千葉覚氏をはじめ鳥嶋地区や鳥屋ヶ崎地区の皆さん、加美町教育委員会から様々な協力をいただきました。記して感謝いたします。



北からみた東山遺跡と壇の越遺跡

東山と壇の越は奈良時代前半に一斉につくられています。この地は、北が高く南が低いという地形的条件に加え、物資の運搬や交通手段として利用できる河川に隣接しており、律令支配の施設をつくるのに絶好な場所でした。



近世以降の屋敷跡(北西から)
近世以降の建物が何度も建て替わられています



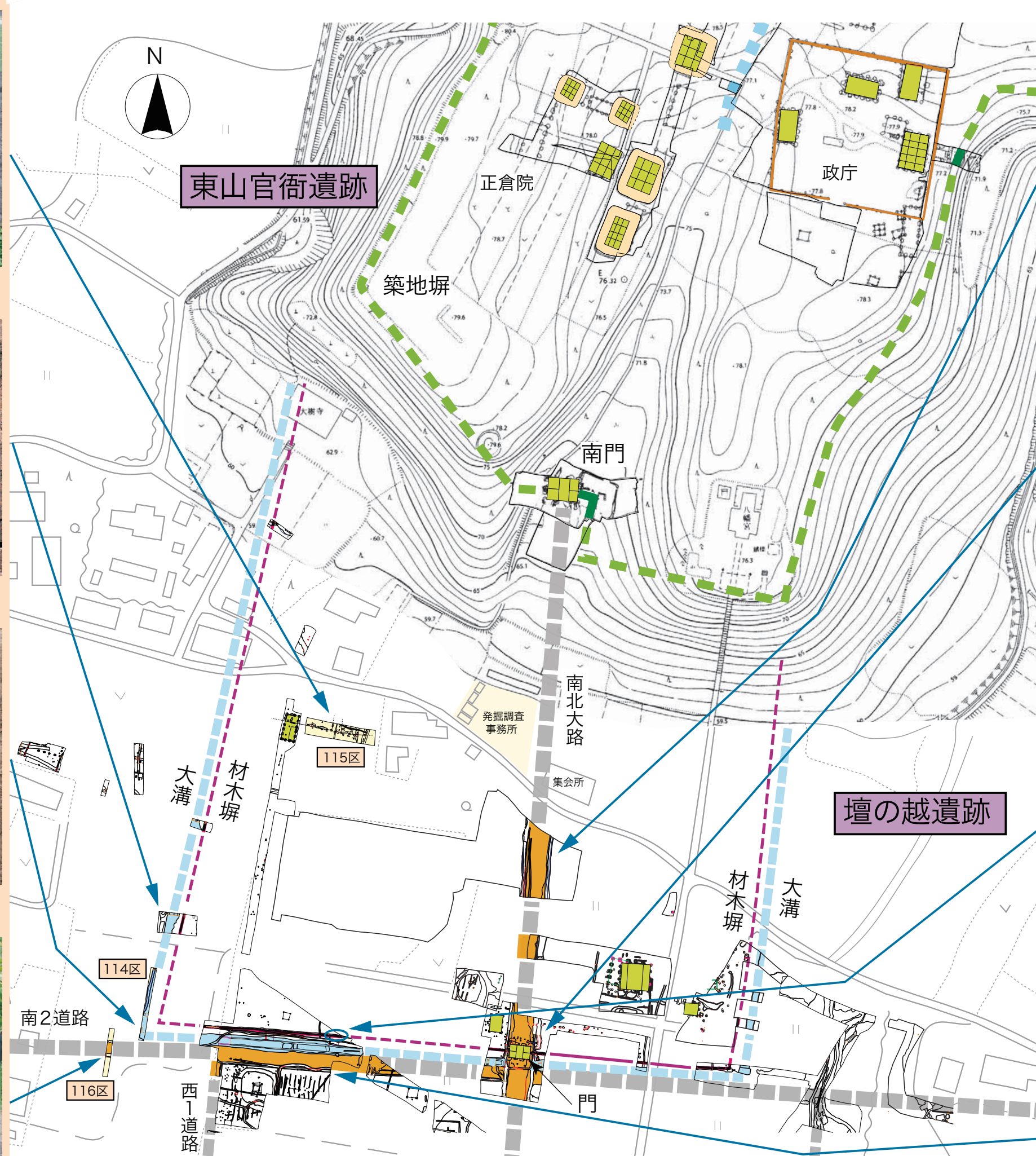
西辺の材木堀跡と大溝跡(北から)
大溝は堀の外側3mの位置につくられています



南東隅の大溝跡(南から)
大溝はここで北に向きを変え、約240m伸びていきます



南郭西側の南2道路跡(南から)
道路は約4mの幅で、西へ伸びていきます



材木堀で囲まれた区画(南郭)と東山遺跡南半部



南北大路跡(南から)
幅は6mあり、側溝は2度改修されています



SB5200八脚門跡(南から)
東山外郭南門から198m南につくられています



南辺の材木堀跡(柱の直径25cm、長さ80cm)
南辺の柱はクリを直径25cm前後の丸太に加工しています



南辺の大溝・材木堀跡と南2道路跡(南西から)
道路の幅は5m前後で、主要な道路と考えています

東山官衙・壇の越・早風遺跡の発掘調査成果2 (宮城県教育委員会・加美町教育委員会)



北東からみた東山遺跡(右下)と壇の越遺跡
壇の越遺跡の基盤目状の街は、奈良時代前半につくられました。街づくりの基準となったのは、南北大路と東西大路で、後者は陸奥と出羽を結ぶ交通路と考えられます。道を行き交う人々にとって、葉菜山は格好な目印となっていたでしょう。



東山官衙遺跡の政庁正殿
政庁は、重要な政務や儀式、宴会を行った場です。正殿はその中心建物で東西10.6m、南北6.2mあります。



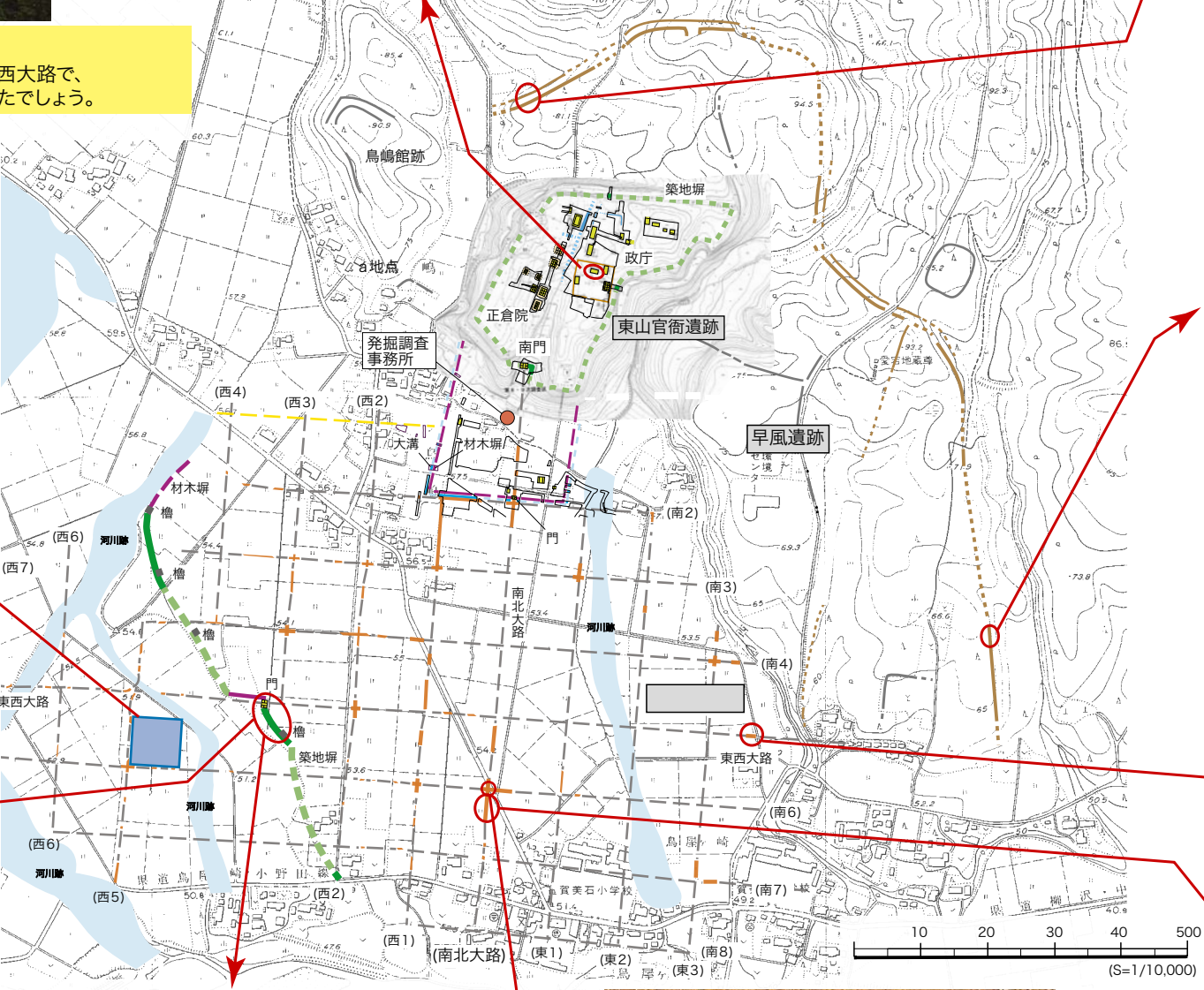
北辺の土塁跡と堀跡(h地点)
北辺や東辺の丘陵部には、土塁と堀が設けられました。北辺の土塁は幅が5.0~7.0mで、堀の底からの高さは4.5m以上ありました。



東辺の堀跡(o地点=本年度調査)
堀は改修されており、新しい堀は幅が5.5m、深さは1.2mあります。



西5南6区の館跡
壇の越の街のなかで最も立派な建物群です。60m四方を材木堀で囲み、中央の広場をはさんで南北棟の主屋と食事をつくった建物が向かい合い、主屋の北側には倉庫が建ち並んでいました。東山を訪れたり、出羽への道を利用した役人などの宿泊施設と考えられます。



東西大路跡(右手奥は東山遺跡)
東西のメインストリートで、街並みの東端付近でも幅は6.7mありました。大路は、東西1.2kmにわたって検出されています。



古代都市を囲んだ築地堀跡
奈良時代末頃、基盤目状の街は堀で囲まれて東山遺跡の内部に取り込まれます。堀は高さが3~4mあり、場所によって構造が異なります。西辺の南側は櫓を伴う築地堀で、東西大路との交点には門が設けられました。



築地堀に設けられた八脚門
門は四脚門から八脚門に建て替えられています。八脚門は二階建てと考えられ、中央の広い部分に扉がつけました。



交差点の'まつり'
交差点の片隅につくられた小穴に、7枚の皿を重ねて埋めています。古代都市の交差点では、特有の'まつり'が行われていました。



南北大路跡(正面奥は東山遺跡)
東山遺跡から南へ延びる南北のメインストリートです。幅は6.0m前後で、他の南北道路と比べて2倍の広さでつくられています。